

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

今、インドネシアのバンドンという町にきています。さつき屋台で鶏肉入りのおかゆの朝食を食べてきたところです。

表通りは車が多くて排気ガスのおいが強いのですが、小さな通りに入ると車の通りも比較的少なくて、ベチャという自転車のタクシー（前に座席があつて、後ろに自転車をこいで運転する人が乗ります）が走っていたりします。ムスリム（イスラム教徒）の人が多いので、女性の多くは色とりどりのきれいな色のスカーフで頭を覆っています。帽子をかぶった男の人もなくさんいます。

夜になると、街灯がほとんどなくて、通りはかなり暗いのですが、いろんな屋台が並び、そのろうそくの灯やわずかな電灯が家族連れや友達どうしでのんびり散歩する人たちの姿をぼんやり照らします。ときどき焼き鳥のおいがしてきたりもします。人々の歩みもどことなくゆっくりしています。

① 日本の都会ではなくなつてしまつた大切なものが、ここにはまだあるような気がします。

1、私が一目で外国人とわかるからなのかもしれませんが、こちらの人々は、よく、目が合うにつこりしてくれます。さつきも、お店のジュンビをしてるおばあさんとふと目が合つて、につこりしてくれました。こちらにもつこりと会釈を返します。夕べもスラビというお餅のような食べ物を買っていると、赤ちゃんを抱いたおばあさんと目が合つてにつこりしてくれました。赤ちゃんがあんまりかわいかったので、思わず「マニース！（甘い、という意味ですが、かわいいという意味もあります）」と言うと、どこから来たの？ と、小さな会話のきっかけになりました。すやすや眠っている赤ちゃんのかわいさは、それこそ万国共通ですが、笑顔もそうなのかもしれません。

につこりするというのは、最も簡単な挨拶です。一瞬であつても、気持ちを通じ合はせるというサインになります。2、時と場合によつては無表情でいることが必要な場合もあるでしょうが、少なくとも、友好的に生活していく上では、表情はとても大切なヨウソクになるということは言えるでしょう。いろんな思いを伝える表情は、いわば、言葉以前の「ことば」と言えるのかもしれませんが。

④ たとえば、アメリカの大統領候補者は自分の表情について研究するそうです。映画俳優でも片方の眉を上げ、そちらのほうの口元だけ笑うようにするという、「顔の半分で笑う」ような表情を見せてくれることもあります。やはり、表情についてソウトウ意識しているのではないかと思っています。

先日、バンドン市内で、小さな子供たちが音楽を聴かせてくれるところへ行つたときのこと、たまにたまに日本人の青年が座つていたのですが、小さな子がやつてきて楽器を貸してくれて、司会者がジョークを言つても、見事なまで終始無表情でした。

私のような中年の世代の思い込みかもしれませんが、日本の青年たちを見ると、あまりにも無表情だなあ、と思うことが正直いってよくあります。3、日本で電車に乗っている時にカンサツする青年たちもそうですが、国際線の飛行機の中などで、サービスを受けるときなども、ほかの国の人たちがサンキューなどと挨拶しているのに、石像のように無表情なままだった、というのを何回か見たことがあります。会釈ぐらいしたほうがいいんじゃないの、と言いたくなります。怒っているの？ 威張っているの？ という印象を抱いてしまうのです（もちろん、そんな人が全部ではありません）。

せんが)。

⑥ もっとも、表情には文化による違いもあります。以前、台湾南部へ行ったときに聞いた話ですが、台湾でもいろんなところから来た人たちがいて、中国大陸南部のある地方から来た人たち(この場合は客家と呼ばれる人たちでしたが)はあまりにここにこない文化なんだそうです。国際結婚をしてその文化の人たちと同じ屋根の下で暮らしている日本人女性の方から伺ったのですが、やはり、最初は怒っているのかな、ととまどったそうです。でも、やがて、表情には出さなくても、あたたかい心を持った、とても優しい人たちであることがわかってほっとしたといいます。

もちろん、表情を出す文化と出さない文化のいずれが「よい」などと言うことはできません。しかし、いろいろな人と出会う現代社会にあつては、文化的なことも含めて、表情について考えてみる(オ)キカイを持つことはいいことのはずです。国際化時代でいろいろな文化の人と出会う場合、愛想のよい表情で失敗することより、愛想が悪い表情で失敗することのほうが多いのではないかという気もします。

そこで、提案です。

4

表情も重要なコミュニケーションの道具なのです。

(森山卓郎『コミュニケーションの日本語』)

— 2 —

問一 部(ア) (オ)のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 部1〜3にはどんなことが入るか、最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返し使ってはけません。

ア しかし イ もちろん ウ さて エ たとえば

問三 部①「日本の都会ではなくなってしまう大切なものが、ここにはまだあるような感じがします」とあるが、「ここ」にはどのような暮らしがあると筆者は言っているのか、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 社会が日進月歩で発展していて、人々が便利さや快適さを実感できるような暮らし。
イ 人々のいきいきとした生活や、ゆったりとした時間の流れが感じられるような暮らし。
ウ 人々がそれぞれ役割を持っていて、お互いがお互いを支え合っているような暮らし。
エ 社会が活気に満ちあふれていて、人々の抱く夢や希望が実現しているような暮らし。

問四 部②「笑顔もそうなのかもしれません」とあるが、これはどういうことか、説明しなさい。

問五 部③「言葉以前の『ことば』と言えるのかもしれない」とあるが、それはなぜか、説明しなさい。

問六 部④「たとえば、アメリカの大統領候補者は自分の表情について研究するそうです」とあるが、なぜそのようなことを「研究する」と考えられるか、説明しなさい。

問七 部⑤「見事なまで終始無表情でした」とあるが、この表現には筆者のどのような思いがこめられているか、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 話しかけられても全く無表情な日本の青年に対して、この国の人々が何とかコミュニケーションをとろうとしてくれることに驚いている。

イ この国の人々とのふれあいを楽しんでいる自分に比べ、周囲の人々の親切に気づかない鈍感な日本の青年に対して怒りを感じている。

ウ 落ち着かない気持ちで過ごしている自分に比べ、異国の人々と接する時でも常に冷静さを保っている日本の青年に感心している。

エ 相手とうまくコミュニケーションをとれていない日本の青年に対して、もっと感情を表にだせばいいのにと残念に思っている。

問八 部⑥「表情には文化による違いもあります」とあるが、ここでは、どういうことを意味しているか、文中の語句を用いて二十五字以内で答えなさい。

問九 部4にはどのような文章が入るか、自分で考えて書きなさい。

問十 あなたが人とコミュニケーションをとる上で、心がけていることは何ですか。あなた自身の体験をふまえて、二百字以内で書きなさい。

— 3 —

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

〈東京にやってきた高校二年生の「僕」は、飛行機に乗り遅れて熊本に帰ることができなくなってしまう。空港で途方に暮れていた「僕」に声をかけてくれたのが「おばさん」だった。事情を聞いた「おばさん」は自分のアパートに「僕」を泊めてくれることになった。〉

僕が押し黙って考え込んでいると、おばさんは意外なことを言った。

「私ね、あなたに最初声をかけたときは、まわりの人たちの偽善的な態度に対して腹が立ってね。どうせみんな『かわいそうだ』って言うだけ言って、いろんな理由をつけて、自分は何もしないのよ。でも、私は違うってことを見せたいだけだったの。誰でもなく、自分自身に対してよ。でね、うちに泊めてあげて、お金を貸してあげて明日あなたを送り出すつもりだったの」

「はい……」

僕は、少し顔を上げた。

「でも、あなたのことが気に入ったわ。それじゃあ申し訳ない気がしてきた」

「どういことですか？」

僕はもつといい待遇を期待して、自然と顔がゆるんだ。

「決めたわ。あなた、自分の力で帰りなさい。私はお金を貸さないわ」

僕は、言葉を失った。おばさんの言っていることがよくわからない。

「何、変な顔してるの」

おばさんは二本目の缶ビール片手に笑っている。ピッチが速い。よりによってこんなタイミングで酔っぱらってしまったのだろうか。

「いや、あの、お金を貸すだけでは申し訳ないって言うから……」

「何だよ若者。だらしがない！」

おばさんは急に大きな声を出した。

「あんた、九州男児だっというからもう少し」¹ のある男だと思っていたけど、案外小心者だね。いいかい。考えてごらんよ。こんなチャンス二度とないわよ。これで私からお金を借りて帰って、向こうから私にお金を送り返してごらんなさいよ。こんな情けない思い出ないわよ。でも、何とか自力で帰ってごらんなさいよ。一生忘れられない思い出になるわよ。男として自分に自信が持てるでしょう」

「言われてみればそうですが……」

「まだ、別の方法考えてるのね。男は決断が大事よ。まずは、そうするって決めてごらんなさい。人生、先がどうなるかなんてわからないのよ。だから悩んでもしょうがない。まずはやるって決めて飛び込むの。誰も経験しなかった夏休みになるわよ。さあ、やるって言ってみなさい」

僕の中で熱い何か^①が湧き起こるのを感じた。そうだ。昔の人は歩いて移動をしていたんだ。今の僕にできないはずがない。

「わかりました。何とかして帰ります！」

「そうだ、若者！ いいぞお。よく言った。もう一回言え！」
「歩いてでも帰ります！」
「もう一回！」

「絶対帰ってみせます！」

「ハハハ」

^② おばさんと僕は二人で笑った。不思議と何とかなる気がしてきた。

「いい顔になってきたね。人間が『絶対にやる』と自分で決めたことは、他の誰にも止めることはできないんだよ」

僕はうなずいた。まずは絶対にやってやると考えることで、ほとんどのことは達成されたも同然なのかもしれない。僕はこれから始まろうとする筋書きのない旅行に少しだけワクワクし始めた。

「そうと決まれば、おばさんが、今のあなたにとってお金なんかよりもずっと大切なことを授けてあげるわ」

「お金よりも、もっと大切なこと……ですか」

^③ 「そうよ。今のあなたは0点だもの。このままでは帰るまでに苦勞し通しでしょうからね」

「0点……ですか？」

何に対してそう言われたのかわからなかったけれども、そう言われたことに腹も立たず、受け入れている自分がいた。

「あなた、このままここを放り出されたら、どうにかして、帰るには帰るかもしれないけど、今のままだと『こんな思いは二度とゴメンだ』と思ってしまうような経験しかできないわ。人間不信に陥ったり、都会の人は冷たいって思ったりして、間違った考えをそのまま自分の人生の教訓にしたりするかもしれないもの」

「……」

僕は何も言えなかったが、おばさんの言っていることを認めざるを得なかった。確かにそのとおりかもしれない。今の僕には、この状況を楽しんで自分の人生においてかけがえのない思い出にする自信などかけらもなかった。

「今の僕にとってお金よりもずっと大切なことって何ですか？」

「人より先に動いて、人の役に立つことよ」

「……」

「あなたね、私があなたを招待したからって、安心してそこに座って出されるままにお茶を飲んでるだけじゃダメよ。あなた、お客じゃなくて居候なんだから」

僕は、崩していた足を正座に戻して、姿勢を正した。

「は、はい……」

「今日はいいわよ。でもね、あなたが今まで家でしてきたように振る舞っていたら、あなたを泊めてよかったと思ってくれる人なんて誰もいないわ。それでも文句も言わずにすべてを受け入れてくれる人は、あなたのお母さんだけ。同じことを彼女にでもやってごらんなさい。三日と待たずにふられるわよ」

「はい……」

「あなたね、あなたが泊まった家では、食事の後片づけ、布団の上げ下ろし、風呂掃除から、トイレ掃除、誰よりも早く起きて、朝のゴミ出し、部屋や廊下、階段の掃除から玄関の掃除まで、そりゃあもうこれでもかというくらい、しつかりやりなさいよ。いいから座つてと言われても、取り上げてでもやるくらいの勢いがなくちゃダメ。わかる？」

「わ、わかりました」

僕は、気が引き締まる思いがした。もちろんタダで泊めてもらえるなんて、²（ ）がよすぎるが、自分が何かをしなければならぬという視点も、まったくなかった。僕はこの家に来てからの自分の過ごし方を反省した。確かに0点だ。

「それができればね、世界中どこへ行っても居候できるわよ。逆にいつまでもいてちょうだいって言われるくらいにね。それにね……まあ、いいわ。あとはやってみればわかることだから。とにかく、それができれば怖いものなしよ」

僕は、ただ緊張してうなずくことしかできなかった。明日はおばさんよりも早く起きてやらなければならぬことがたくさんありそうだ。

「さあ、心も決まったことだし、風呂にでも入っておいでよ」

思えば朝から汗が乾く間もない一日だった。

さっきまでの僕なら、「それじゃあ」とばかりに、言葉に甘えるところだったが、おばさんに先に入ってもらった。

その間に、食器を洗ったり、テーブルを拭いたり、とりあえず思いつく限りのことをした。

お風呂から上がったおばさんは、感心した様子で、

「行動が早いのはいいことね。その調子よ」と言ってくれた。

床と壁がタイル張りの浴室に、ステンレスの小さくて深い浴槽。ずっと昔、母方の実家に行ったときの雰囲気を出す。湯船に入ると、自分がどうしてこんなところにいるのか改めて不思議になった。

「昨日の今頃、まさかこんなところで風呂に入ることになるなんて想像できなかったよ……」

そして、明日からまた予想もつかない日々が待っている。

④ 僕の心は少しだけ躍っていた。

風呂から出るときに、浴槽をピカピカに掃除してから出たのは言うまでもない。

【 中 略 】

おばさんには今年二〇歳になる息子がいる。

その子が中学に入るときに離婚して、女手一つで育てていたらしいが、身体を壊して仕事ができなくなってしまったことと子供の高校進学が重なってしまったそうだ。かなり悩んだらしいが、元の旦

那さんが親権を主張していたため、息子さんの将来のことを考え、子供を旦那さんが引き取り、おばさんは一人で暮らすことを決意したらしい。

僕が着ている服は、その息子さんが中学三年生のときに着ていたものらしい。

ジャージの丈から判断すると、小さなおばさんからは想像つかないほど、大きな中学生だったということだろう。旦那さんが大きな人だったのかなあと僕はどうでもいいことを考えていた。

そんなことを笑いながら教えてくれたおばさんは、僕に話をしながら、きつと大きくなった息子さんを想像していたんだろう。

「お会いになっていないんですか？」

「そうね。それ以来一度もね」

「会いたがってると思いますよ。息子さん」

「そうかもしれないけどね、どんな理由があれ、子供を捨てた母親の私に会いたなんて言い出せないものよ。ちょうど中学三年生って多感な時期でしょ。私のことを嫌いになってもうしなくなってるね、本心ではないことを言わなきゃならなかったのね」

「ウソをついたんですか？」

「そうよ。どうしても私と一緒にいたいって聞かないから、『私は一人がいいの。あなたと離れて自分の人生を生きたいの』って。そしたら、その日のうちに元亭主に自分で電話をして、迎えに来てもらって、……で、いなくなっちゃったわ。もうあともどりができない事態になっちゃったのね。今のあなたと同じね。今は静岡の元亭主の実家に住んでいるわ」

⑤ おばさんの表情は笑っていたが、目には涙が浮かんでいた。

「このTシャツは……」

「それはね、あの子の誕生プレゼントに買ったもののなの。送ろうかなあと考えてね。でも、送ることはできなかったわ」

「おばさん、もしかして毎年買ってるでしょ」

「そうね。でも、結局送ることはできないのね。あなたに偉そうなこと言えないわね。勇気がないのは、私のほうね」

「送りましょうよ」

「ダメよ。あの子が今、幸せなら、私が邪魔をするわけにはいかないでしょ」

「でも、待つてるかもしれませんよ」

「それを確かめるすべはもうないのよ。でもきつといつかは渡せる日がやってくると思うわ。あの子が自分から私に会いたいと思ってくれてくれる日がね。そのときを楽しみにしておくわ」

僕はそれ以上、何と言えはいいのかわからなくなった。

「……そうだ。おばさん、写真撮りましょうよ、一緒に。きつと一生の思い出になりますから」

僕は鞆の中からデジカメを取り出した。

「そうね。いいわね、それ」

僕たちは、とびきりの笑顔でフレームに収まった。

おばさんと並ぶように布団を敷いた僕は、疲れているはずなのに天井を見つめながらなかなか眠れ

なかった。天井の木目がおばさんと息子さん、二人の顔のように見えた。

おばさんの寝顔は、穏やかでなんだか小さい女の子のようにも見えた。こんなに穏やかな寝顔の人にもいろんな人生があるんだ。僕はとても複雑な思いを胸に、天井とおばさんの寝顔を交互に眺めていた。

翌朝、僕が起きたとき、隣に布団はなかった。

「しまった」

おばさんは台所で忙しそうに動き回っている。

「おはようございます。僕、早起きしようと思ったんですけど……すみません」

「おつ、若者起きたね。昨日あんな話を私がしておいて、あなたよりもあとに起きるなんてかつこわるくてできないわよ。昨日はあまり寝られなかったかな？」

「いえ……大丈夫です」

「じゃあ、顔を洗ってらっしゃい。今すぐご飯ができるからね」

おばさんは嬉しそうに食卓に二人分の食事を用意していた。

僕の前にはさまざまなおかずが並んでいく。朝食としては本当に豪華だ。

「これで最後」

そう言いながら、よそつたご飯を僕の前に置くと、おばさんはエプロンを外し、自分もイスに座った。

「よし、食べよう！」

僕は、無言で小さくうなずくと、両手を合わせた。

「いただきます」

おばさんは、僕というよりは、自分の息子のためにこうやって朝食をつくりたいのだろう。僕はその瞬間だけでもいい、おばさんの子供になってあげたいと思った。

「おばさん！」

「ん？」

「この、卵焼きおいしいです。僕のためにこんなに手の込んだものをつくってくれてありがとうございます」

お箸を止めていたおばさんがニコツと笑った。

「あなた、そんなことお母さんに言ったことないでしょ。それお母さんに言ってあげなきゃダメよ。あなたにご飯をつくる気持ちは、今日の私があなたにつくった気持ちと同じなんだからね」

僕は強くうなずいた。なぜだか涙が出てきた。

それを隠すように、僕は目の前に並んだものをむさぼり食った。

おばさんは自分のおかずまで僕に差し出して食べさせようとした。

僕は断り切れず、限界まで食べた。おばさんの息子の分まで食べようとしていた。

「そういえば、夕べ、お風呂とトイレの掃除もしてくれたんだね。ありがとう」

「いいえ、どちらも使わせていただいただけでやっただけです」

「やってみてどうだった？」

「何もしないよりも、気持ち的に楽でした」

「そうでしょ。実は居候っていうのは、泊めてもらう側もストレスが大きいんだよ。だから、何かで誰かの役に立っているという実感がないと、楽しく過ごすことなんてできないんだ」

「わかります。自分が何かをお手伝いすることによって、ここにいることを楽しむことができるんですね。おばさん、昨日はそれを教えてくれようとしたんですね」

「あなた、今までそういうことやったことないでしょ。でもね、あなたにとって居心地のいい場所は、まわりの人があなたに何をしてくれるかによってじゃなくて、あなたがまわりの人のために何をするかによって決まるの。家も、学校も、職場も、全部同じね。そんなこと考えなくても、あなたがそこそこ幸せだったのは、あなたの家には、たとえあなたがどんな態度をとってもそれを毎日やってくれる人がいるからよ。そのことを忘れちゃダメね」

そのとおりだ。僕は家の手伝いなんてしたこともなかった。

ゴミ出しも、自分の部屋以外の掃除も、トイレも風呂も、食事の支度も、片づけも、すべて母親が当たり前のようになんてしてくれていた。それでも出て行けと言われなかったのは、そこが自分の家であり、親に対する甘えだったのだろう。自分の家以外の場所で通用するはずがない。

朝食を食べ終えると、ふうっと一息ついて、静かに目を閉じ、両手を顔の前で合わせた。

「ごちそうさまでした」

僕は今までの人生の中でいちばんありがたいと思った朝食を終えた。おなかはいっぱいだったが、今の気持ちのまま自分の母親の朝食が食べたいと思った。

目を開けると、そこには満足げに微笑むおばさんがいた。

（喜多川泰『また、必ず会おう』と誰もが言った）

問一 わくわく部 (a)「筋書きのない」・(b)「言うまでもない」の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

(a)「筋書きのない」

ア 時間に追われることがない。 イ 目的がはっきりとしない。

ウ 誰からもしばられない。 エ 予定が定まっていない。

(b)「言うまでもない」

ア 黙っているべきことだ。 イ 分かりきったことだ。

ウ とるに足りないことだ。 エ どうしようもないことだ。

問二 ―― 部1・2の（ ）に適切な漢字一字を補って、慣用句を完成させなさい。

問三 ―― 部①「熱い何か」とあるが、これを具体的に説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他人事だと思って、勝手な考えを押しつけてくる「おばさん」への激しい怒り。

イ「おばさん」に言われたとおり、誰にも頼らずに自宅に帰ってやろうという強い意欲。

ウ とにかく楽をして家に帰りたいという本心を「おばさん」に見抜かれた恥ずかしさ。

エ 前からやってみたかった一人旅に挑戦する勇気をくれた「おばさん」への感謝。

問四 ―― 部②「おばさんと僕は二人で笑った」とあるが、この時点で「僕」は「おばさん」のことをどう思うようになっているか、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 帰宅のためのお金は貸してくれなかったものの、僕を何とか自力で帰ろうという気にさせるおばさんの言葉の巧みに感心している。

イ 歩いてでも熊本に帰りなさいなどの予想外の命令ばかりしてくる「おばさん」の勢いに飲まれてしまい、笑うしかないと思きらめている。

ウ 金を借りずに熊本に帰れというのは無理難題に聞こえたが、話を聞いて筋が通っていると納得し、「おばさん」を信頼し始めている。

エ 若者のあるべき姿やいかにして熊本に帰るべきかを「僕」に思いきりぶつけてくる「おばさん」の語り口に滑稽さを感じている。

問五 ―― 部③「今のあなたは0点だもの」とあるが、「僕」のどのようなところを「0点」だと言っているのか、説明しなさい。

問六 ―― 部④「僕の心は少しだけ躍っていた」とあるが、これはどのような心情か、説明しなさい。

問七 ―― 部⑤「おばさんの表情は笑っていたが、目には涙が浮かんでいた」とあるが、それはなぜか、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ずっと変わらぬ様子で明るく振る舞ってはいるものの、息子に会えないつらさや別れた当時のせつなさなどが自然とこみ上げてくるから。

イ その場しのぎの言動を繰り返した自分を愚かに思いながらも、独りぼっちで暮らさなければならぬ不安や寂しさなどを抑えきれないから。

ウ 息子のために嘘をついて追い出してしまったのは自分なのに、孤独な状況に追い込まれたことに腹立たしさや悔しさなどを覚えているから。

エ 自分の失敗談で「僕」を笑わせようとするのだが、「僕」が逆にどんどん深刻な表情になっていくことに、やるせなさやむなしさなどを感じているから。

問八 ―― 部⑥「僕はとても複雑な思いを胸に、天井とおばさんの寝顔を交互に眺めていた」とあるが、この部分での「僕」の心情として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 遠く離れた息子のことを思いやりつつも、再会できないもどかしさを感じている「おばさん」の思いが、なんとか息子に伝えられたいのになあと願っている。

イ 自分の伝えたいことを遠慮なく口にする気の強さがあるが、そのくせ実は息子に会いたくても会えないという寂しさを抱えている「おばさん」に同情している。

ウ 毎年誕生プレゼントを買っている「おばさん」をいじらしく思うと同時に、そんなことも知らず、のんきに父親と暮らしている息子を腹立たしく思っている。

エ 「僕」のためにいろいろなアドバイスをしてくれたのに、自分は親としての役割を果たせていないことを気にしている「おばさん」の苦しい胸のうちは気遣っている。

問九 ―― 部⑦「おばさんの息子の分まで食べようとしていた」とあるが、このときの「僕」の心情として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「おばさん」が大切なことを教えてくれたお礼として、無理にでもたくさん食べることで、息子に会えないもどかしさを忘れさせてあげようとしている。

イ 息子に作るように愛情を込めて豪華な朝食を作ってくれた「おばさん」の厚意に感謝するとともに、息子のかわりにこの朝食をしっかりと味わおうとしている。

ウ 昨日から「おばさん」と接しているうちに、自分が「おばさん」の息子であるように錯覚し始めており、朝食を用意してもらうのは当然だと思い込んでいる。

エ こんなにも手間暇をかけて朝食を作ってくれる「おばさん」に会いに来ない息子にいらだち、「おばさん」の朝食を食べさせてやるまいと意地になっている。

問十 ―― 部⑧「おなかはいっぱいだったが、今の気持ちのまま自分の母親の朝食が食べたいと思った」とあるが、それはなぜか、その理由をわかりやすく説明しなさい。

【三】 例にならって、二つの（ ）に意味が反対の漢字を入れ、①～⑤の四字熟語を完成させなさい。

〔例〕（ ）交（ ）攻↓（遠）交（近）攻

- ① （ ）口（ ）音 ② （ ）往（ ）往
③ （ ）耕（ ）読 ④ （ ）名（ ）実
⑤ 針（ ）棒（ ）

【四】 — 部の意味として最も適切なものをそれぞれ後から選び、記号で答えなさい。

① 空がにわか**に**明るくなった。

ア 少し イ しだいに ウ とても エ 急に

② とりとめの**ない**話を続けた。

ア 信用できない イ まとまりがない ウ 手ごたえのない エ 目新しくない

③ 道で転んで、したたかに腰を打ち付けた。

ア 軽く イ しぶとく ウ 強く エ やさしく

④ 試験はおしなべてよくできた。

ア かなり イ すべて ウ まあまあ エ やっぱり

⑤ 長老は、おもむろに口を開いた。

ア ゆっくり イ いきなり ウ きびしく エ とうとう

【五】 例にならって、次の①～⑤の各文中の□に適切なひらがなを補って — 部のことばを完成させなさい。ただし、□ひとつにはひらがな一字が入るものとします。

〔例〕砂糖を入れすぎてコーヒーが**あま□□□**くなってしまった。↓答 あま**つた**るく

① あなたの古□□いやりかたは今の時代に通用しない。

② 車内は満員で非常に暑□□□い。

③ 長□□□い前置きはいらなから、単刀直入に言ってくれ。

④ 軽□□□く個人情報を教えてはいけない。

⑤ その老人は□□□□広い屋敷にたった一人で住んでいた。

